

三国志の幕開けとなった黄巾の乱



神奈川歴史研究会々長
竹村 紘一

中国後漢末期の西暦 184 年（中平 1 年）に太平道の教祖張角を指導者とする太平道の信者が各地で起こした大規模な農民反乱。目印として黄巾と呼ばれる黄色い頭巾を頭に巻いた事から、この名称が付いた。また、小説『三国志演義』では反乱軍を黄巾賊と呼称している。後漢の衰退を招き、三国時代に移る一つの契機となった。

黄巾の乱の原因

後漢王朝は度重なる宦官と外戚（皇后の一族）、官僚らの抗争によって疲弊し、北の諸民族の動きも活発になっていたがこれらは黄巾の乱の直接の原因ではなかった。

桓帝が亡くなって同じ河間王系の傍系から霊帝が即位した際には朝廷の金蔵は桓帝の浪費によって空で、傍系で貧乏皇族であった霊帝にはたいした財産もなかったので自由にできる金が欠乏した。そこで、公式かつ大々的に官位を売りに出して金集めを始めた。いわゆる売官である。こうなるともはや汚職を隠す必要すらなくなり、腐敗が進んだ。

これらの資金を調達する為に農民には二重三重に税がかけられ搾り取られるようになった。

この時、道教の流れを汲む太平道を唱える張角が現れて奇跡を見せ予言を行ったので収穫しても食っていけないほど税を取られて絶望のどん底にいた民衆はこれに従い、張角の予言した「黄天」の世を夢見たのであった。

五行思想（万物は木・火・土・金・水の 5 種類の元素からなるという説）で漢王朝は「火」（赤）と考えられ、次の王朝は「土」（黄）と考えられていたために張角は黄巾を目印としたのであった。

蜂起

冀州鉅鹿の張角は『太平清領書』に基づく道教的な悔過（罪や過ちを悔い改めること）による治病を行った。それをもって大衆の信心を掌握し、政治色を濃くしていった太平道は、数十万の信徒を三十六個に分け、一単位を「方」とし軍事組織化していった。そして武装蜂起を計画した張角は、漢王朝の転覆を暗示した「蒼天已死 黄天當立 歳在甲子 天下大吉」（『後漢書』71 卷 皇甫嵩朱儁列傳 第 61 皇甫嵩伝、蒼天すでに死す、黄天まさに立つべし。歳は甲子に在りて、天下大吉）というスローガンを流布し、役所の門などに「甲子」の二文字を書いて呼びかけた。

184 年（光和 7 年、干支年は甲子）、先に荆・揚州で兵を集めさせていた腹心の馬元義を洛陽に送り込み、中常侍の封諱、徐奉等を内応させ 3 月 5 日に内と外から蜂起するよう約束したが、張角の

弟子の唐周が宦官達に密告した事で蜂起計画が発覚し、馬元義は捕縛されて車裂き刑に処せられた。事を重く見た霊帝は三公（秦や前漢では行政を司る丞相（大司徒）、軍事を司る太尉（大司馬）、監察・政策立案を司る御史大夫（大司空）の三官が三公と呼ばれ、後漢以降は司徒、司空、太尉と名を改められた）や司隸（漢代に都が置かれた長安・洛陽及びその周辺一体の首都圏行政を監督した司隸校尉の管掌地域。漢の帝都、長安と洛陽を取り巻く河南尹・河内郡・河東郡・弘農郡・京兆尹・右扶風・左馮翊の七郡を統括）に命じ、宮中の衛兵や民衆を調べさせ千人余りを誅殺し、張角捕縛の命を下した。

2月、事が漏れた張角は予定より早く諸方に命じ一斉に蜂起し、自らを天公將軍と称し、弟の張宝、張梁をそれぞれ地公、人公將軍とした。

3月、霊帝は何進を大將軍とし將兵を都亭に駐屯させ、八つの関に都尉を置き洛陽を守護させた。名将との誉がある將軍皇甫嵩や忠義の宦官呂強等の進言によって党錮の禁を解き、官界から追放されていた清流知識人が黄巾賊に合流するのを防ぎ、且つこれを利用した。中平二年（188）には、天子が直卒する西園軍が創設され、西園八校尉が選抜され首都の警護に当たることになる。また宮中に蓄えられていた倉の銭と西園の馬を出し人材を募り、盧植を張角がいる冀州方面へ、皇甫嵩と朱儁に豫州潁川方面へと、それぞれ黄巾の勢力が強い所へ派遣した。この三人は後漢の名将であった。

鎮圧の経過

豫州・潁川黄巾軍

184年4月、朱儁は潁川にて波才と激突し敗走する。

5月、皇甫嵩、朱儁は長社に籠城し、それを波才は大軍を持って包囲した。劣勢の中、皇甫嵩は軍を鼓舞し火計を用いて波才軍を混乱させ長社を討つて波才軍を敗走させた。そこにちょうど援軍に來た曹操軍と合流しさらに戦い大いに打ち破り、追撃し陽翟において波才軍を、6月に西華にて彭脫軍をそれぞれ壊滅し、黄巾の別働隊を破った王允と共に豫州を平定した。

荊州・南陽黄巾軍

184年3月、荊州南陽にて張曼成率いる南陽黄巾軍が蜂起。太守・褚貢を攻め殺した上、自らを「神上使」を称し、宛に駐屯した。

6月、新しく南陽太守に任命された秦頡は張曼成を攻めこれを斬ったが、南陽黄巾軍は新たに趙弘を指揮官に立てて盛り返し、宛城に籠った。豫州を平定し終えた朱儁は荊州刺史・徐璆、秦頡と合流し宛城を包囲した。

8月、宛城を包囲中に何者かが朱儁更迭を進言しているという噂が流れる。この事態を受け、朱儁は急遽攻撃を開始し趙弘を斬った。趙弘を失った黄巾軍は韓忠を代わりに立て再び宛城に籠ったが、朱儁揮下の孫堅の活躍もあり宛城は落城した。韓忠は脱出し降伏しようとするが朱儁が受け入れず、その後、打ち破られた韓忠は秦頡に殺されてしまったため、南陽黄巾軍は新たに孫夏を立て抵抗を続けた。

10月、朱儁は激しく抵抗を続けた孫夏をついに破り南陽黄巾軍を壊滅した。

冀州・張角軍（黄巾軍の主力）

184年6月、冀州にて黄巾軍に連戦連勝した盧植軍は、張角が広宗に籠城するとそれを包囲し攻

め落とそうとした。盧植軍は終始優勢だったが派遣されてきた小黄門・左豊に賄賂を贈らなかつたため、恨まれ讒言されて職を解かれてしまう。代わりに董卓が派遣されたが逆に黄巾軍に敗れた。

8月、霊帝は豫州を平定したあと兗州東郡において卜己軍を打ち破った皇甫嵩を冀州に派遣するよう命じた。

10月、皇甫嵩は広宗で黄巾軍を奇襲によって破り張梁を斬った。この時、既に張角は病死していたのでその遺体を引きずり出し晒した。さらに鉅鹿太守の郭典と共に、曲陽にて張宝を打ち破りこれを斬った。これにより指導者を失った黄巾族は瓦解し、黄巾の乱は収束に向かう。皇甫嵩が最大の殊勲者であった。

その後の影響

しかしながら、張角ら幹部が死去した後も乱の根本的原因である政治腐敗による民衆への苛政が改善されることはなく、黄巾軍の残党はこの後も広範な地域に跋扈し、反乱を繰り返したり、山賊行為や盗賊行為を行ったりしていた。これらの中で楊奉、韓暹に率いられ白波谷に拠った残党は「白波賊」と称されたが、献帝の洛陽帰還の際に後漢に帰順し、皇帝奪還を目論む李傕や郭汜らと交戦した。後に盗賊のことを「白波」と称するのはこれによる。また、青州は黄巾軍が大流行しており、青州の黄巾軍100万人が中国北部を大いに荒らし、北方の勇将と名のある公孫瓚に大敗する。

187年、張純が反乱を起こし青州刺史は張純討伐を命じた。討伐軍が平原を通過した時、劉子平は劉備が武勇に優れていると述べて従事に推薦した。劉備は従軍し、田野で敵軍と戦い負傷し、死んだ真似をして後から友人に助けられ脱出、軍功により安熹県の尉になったという（魏の官僚で歴史家であった魚豢（ぎょかん）の著した『典略』）。余談であるが、魚豢の著した『魏略』に初めて倭国が登場するのである。これは魏志倭人伝より古い記述である。

192年、兗州刺史の劉岱が戦死。黄巾軍の勢力が弱かった涼州のような地域でも後漢政府の統制が弱まったため、韓遂らが相次いで無軌道な反乱、自立、抗争を繰り返し、異民族も辺境でしばしば略奪行為をおこなった。このような治安の悪化に備えるため、主に豪族を中心にして村落共同体規模で自衛・自警のための武装を行うものが現れた。刺史は当初は監察官であったが、後に州の長官となった。牧という職が後に出来、刺史となったり牧となったり名前の変遷が

あった。並列的に存在したこともある。本邦の国主とほぼ同意語と考えると可と思われる。西暦188年、霊帝は、事態を收拾する為に刺史を牧とまた改称、

そして兵力を付けた上で九卿クラスの劉焉、劉虞、黄琬を各州に派遣して、力で反乱を抑えるように命じたが、決定は不徹底であり、それ以前に任命された、刺史も官職としては残っていた。州牧と刺史は並立するようになり支配権を求めて対立、刺史、州牧、入り乱れて抗争はさらに加速することになった・・・

治安の悪化に伴い、知識人を含む多くの民が難を避けて荊州・揚州・益州・交州など江南や四川の辺境地域に移住したことは、これらの地域の文化水準の向上と開発を促し、これらの地域が自立する素地をなしたことは三国時代やその後の南北朝時代の要因となった。

黄巾の乱以後、地方に軍閥的な勢力が多数出現し、これらによる群雄割拠の様相を呈するが、これら軍閥を支えていたのは黄巾の乱により武装化した豪族たちと広汎な地域に拡散した知識人たちであった。後漢衰亡後の戦乱は離合集散あったが、権力闘争は次第に終息に向かい魏を建国した曹操、呉

を建国した孫権、蜀（蜀漢）を建国した劉備の三勢力に統合されて行くのである。いわゆる三国時代の到来であった。